

柳之御所史跡概要



柳之御所遺跡とは

柳之御所遺跡とは

柳之御所遺跡は、平安時代の末（12世紀）に平泉に拠点を置いた奥州藤原氏が政治を行った場所と考えられ、鎌倉時代の歴史書『吾妻鏡』に記されている「平泉館」と推定されています。中尊寺や毛越寺などの華麗な寺院や庭園跡とは異なる一面である、奥州藤原氏の統治者としての権威を今に伝えてくれる遺跡です。

この遺跡は1980年代末から一関遊水地事業などに伴い、大規模な調査が行われ、遺跡の価値が明らかになってきました。その結果、多くの方々のご協力により遺跡が保存されることになり、現在に至っています。70回を超える発掘調査によって、堀・園池・掘立柱建物・井戸などの遺構とともに、京都や海外との交流を示す土器や陶磁器などが、数多く見つかっています。保存が決定したのち、遺跡の重要性が評価され、国の史跡に指定され保護されています。また、出土遺物も一括品としての価値が高く評価され、一部は重要文化財に指定されています。



柳之御所遺跡史跡公園

柳之御所史跡公園と出土遺物

遺跡は発掘調査の成果から検討が進められ、史跡公園として整備されています。公園では、2代基衡の終わり頃から3代秀衡の初め頃の1160年頃の様子を示しています。建物跡や池跡を表示し、また、当時の地形を復元して、当時の環境を感じることができます。

また、重要文化財に指定された遺物は1000点ちかくにも及びます。遺跡からは10tを超えるかわらけなど膨大な遺物が出土しています。

展示品には、儀式の道具として使われたかわらけや折敷をはじめ、国内産や中国産の陶磁器、銅印などの金属製品、文字資料を含む多種多様な木製品など豊富な内容をもっています。これらは、柳之御所遺跡において、人々がどのような生活を行っていたのかを今に鮮やかに伝えてくれます。

世界遺産としての平泉

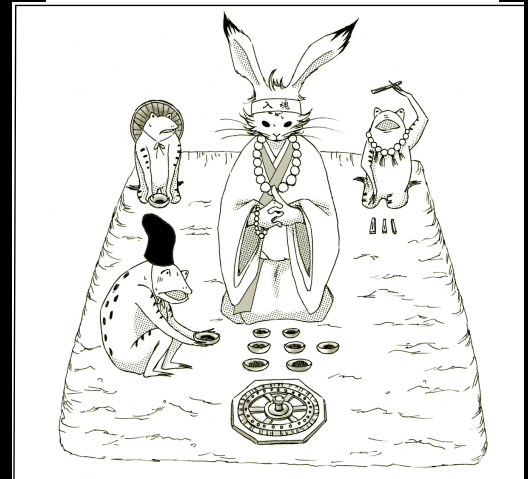
資産名 平泉一仏国土（浄土）を表す建築・庭園及び考古学的遺産群
構成資産 中尊寺、毛越寺、観自在王院、無量光院、金鶏山

平泉の文化遺産は寺院・庭園を中心に5つの資産が世界文化遺産となっています。また、柳之御所遺跡をはじめとしてそれ以外にも多くの貴重な遺産が平泉周辺には存在しています。世界遺産を生み出した奥州藤原氏の理念はこれらの現在に残された資産を通して、現代にまで伝わっています。



重要文化財 岩手県平泉遺跡群（柳之御所遺跡）出土品





火舎と花瓶



いろいろな道具



糸巻き

さまざまな生活の道具

柳之御所遺跡をはじめ平泉では、当時使われていた多数の道具類が出土しています。材質は木、鉄、石など、その種類も、日常生活に使われた道具、仕事や遊びに使われた道具、生産に使われた道具など多種多様なものが見つっています。

木製品では、杓子、箆などの調理具や箸・椀などの飲食具などが、豊富に出土しています。トイレトペーパーの機能をもったちゅう木と呼ばれる割材も多量に出土しています。材質は杉の薄い板材を加工したものが多く、中には折敷などからリサイクルされたものもあります。多くは材を割ただけの簡素なものですが、端部を切り落として調整するなど加工しているものもあります。生活の道具では下駄も出土しており、一木作りの連歯式と歯を差した差歯式があります。すり減ったものもあり、使用のようすがうかがえます。

仕事の道具

このほかに政治の中心にふさわしく、紙(漆紙)、筆先、硯、物差しなどの文具も出土しています。銅製の印章が出土していることから、遺跡内で行政にかかわる仕事が行われていたことがわかります。また、遊戯具として、碁、将棋の駒、碁石、木トンボなどが出土しており、当時この場所が、行政などの仕事の場だけではなくたことがわかります。生産に関わるものでは、糸巻きや御簾錘、漆塗りのパレットや刷毛が出土しています。糸巻きは特に多く出土し、現在と形態がほとんど変わりません。

石製品では文具の硯のほか、カイロのように使った温石や、石鍋なども出土しています。これらは産地の限られる滑石製のもので、生活のようすとともに交易の実態も示す資料です。鉄製品も武具や馬具が出土しています。



糸を紡ぐ様子
『春日権現験記絵』より



ちゅう木を使っている
子ども『餓鬼草紙』より

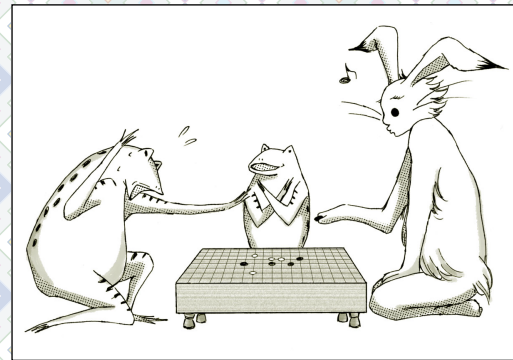
Image: TNM Image Archives



ちゅう木



遊戯具



鏡

松双鶴鏡は2羽の鶴が飛んでいる周りに松が配されています。また、周囲には蝶も飛んでいます。

直径は11.5cm、重量が264gです。この文様の表現は京都などでみられるものとはやや異なるものです。平泉では志羅山遺跡で鏡の鋳型が見つっていることもあり、平泉で生産された可能性も指摘されています。この鏡は柳之御所遺跡の井戸跡の底面近くから出土したもので、井戸が廃される時に何らかの儀式に用いたとも考えられます。

この鏡のほかに八稜鏡と呼ばれる8つ端部に稜がつくものも出土しています。また、町内でも何枚か出土していますが、完形のものはいくつか貴重な資料です。



松双鶴鏡

建物の復元に向けて

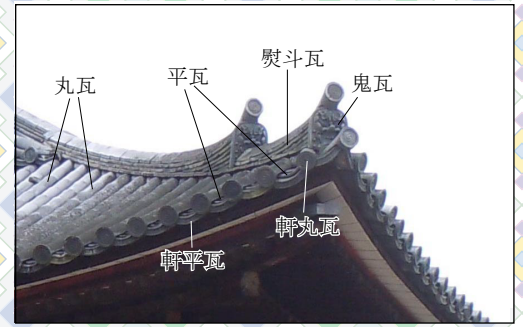
建物の部材

柳之御所遺跡の豊富な出土品の中には、建築に関連すると推定される木製の部材や土壁片、金具類、瓦などがあります。これらの建築部材は、遺跡にどのような建物が建てられていたかを知る直接的な手掛かりとなります。これらの資料を参考としながら、中心建物のCGや模型の製作を行い、建物の復元を進めています。

これらの建築部材の用途を特定出来るものは限られています。現在、分かっているものは、屋根葺き板、破風板、格子、柱、懸魚などです。屋根葺き板や破風板など長大なものが多く、当時の建物の規模がうかがえます。用途がわからない部材にも特徴的な構造のものが多く、より具体的に建物が復元できる材料として検討を進めています。

屋根瓦

瓦は柳之御所遺跡では出土が少なく、総瓦葺きの建物は多くなかったことが分かっています。しかし、同時期の東北地方では平泉以外に瓦の出土はほとんどなく、とても貴重な資料です。平泉でも瓦が出土するのは柳之御所遺跡のほかには中尊寺などに限られます。瓦の多くは町内の志羅山地区で生産されたと考えています。このほかに建物の壁材料である土壁が、焼けた状態で416kg出土しています。全国的に見ても、これだけの土壁が出土している遺跡は少なく、当時の建物の壁材料を推定する上で重要な資料です。



瓦の名称



瓦



建築部材

建物のCG復元

西の建物は、約11m×14mの大きさで、建物の位置や柱規模から東の建物より格が高いと考えられます。このため、貴族や高僧などの客人を迎えるの儀式が行われたと想定しています。東の建物は、南北の長さが25mもある長大な建物跡です。武家的な儀式の場として使われたと考えています。

復元では、御簾や部などを用いて開放的な西の建物に対して、土壁など閉鎖的な東の建物として設計しています。



西の建物



東の建物